

弁証法の問題について

弁証法の問題について*

* 『弁証法の問題について』は、レーニンが哲学にかんするノート 10 冊のうち 1 冊に書いた断片である。これらのノートは、『哲学ノート』という形で、1933 年にはじめて単行本として出版された。

一つのものの二つのものへの分裂と、この一つのものの矛盾した二つの部分の認識（ラッサール『ヘラクレイトス』の第三篇（『認識について』）のはじめにある、ヘラクレイトスについてのフィロンからの引用文を見よ）とは、弁証法の核心（「本質」の一つ、唯一の根本的な特性あるいは特徴ではないまでも、根本的な特性あるいは特徴の一つ）である。ヘーゲルもまさにこのように問題を提起している（アリストテレスは、その『形而上学』のうちでたえずこの問題をめぐってもがいており、ヘラクレイトスあるいはヘラクレイトスの諸思想と格闘している）。

弁証法の内容のこの側面の正しさは、科学の歴史によって検証されなければならない。弁証法のこの側面には、通常（たとえば、プレハーノフのばあい）十分な注意がはらわれていない。すなわち、対立物の同一は実例の総和と解されて「たとえば、種子」、「たとえば、原始共産主義」、エンゲルスにあっても同じである。しかし、これは「通俗化のため」である……]、認識の法則（および客観的世界の法則）とは解されていない。

数学では、**十**と**一**。微分と積分。

力学では、作用と反作用。

物理学では、陽電気と陰電気。

化学では、原子の結合と解離。

社会科学では、階級闘争。

対立物の同一（おそらく対立物の「統一」というほうが正しいのではないか？ もっとも同一と統一という術語の区別は、ここではとくに重要ではないが。ある意味では両方とも正しい）とは、自然（精神も社会もふくめて）のすべての現象と過程とのうちに、矛盾した、たがいに排除しあう、対立した諸傾向を承認すること（発見すること）である。世界のすべての過程を、その「自己運動」において、その自発的な発展において、その生きいきとした生命において認識する条件は、それらに対立物の統一として認識することである。発展は対立物の「闘争」である。二つの根本的な（あるいは二つの可能な？ または歴史上に見られる二つの？）発展（進化）観は、減少および増大としての、反復としての発展、および対立物の統一（一つのものがたがいに排除しあう二つの対立物に分裂すること、および両者の相互関係）としての発展である。

第一の運動観にあつては、自己運動が、その推進力が、その源泉が、その原動力が、かげにかくれたままである（あるいは、この源泉が外部に——神、主観、等々にうつされる）。第二の運動観にあつては、おもな注意はまさに「自己」運動の源泉の認識に向けられる。

第一の考えは、死んだ、生気のない、ひからびたものである。第二の考えは、生きている。第二の考えだけがすべての存在するものの「自己運動」を理解する鍵をあたえる。それだけが、「飛躍」、「漸次性の中断」、「対立物への転化」、古いものの消滅と新しいもの

の出現を理解する鍵をあたえる。

対立物の統一（合致、同一、均衡）は条件的、一時的、経過の、相対的である。たがいに排除しあう対立物の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である。

注意(NB)——主観主義（懐疑論と詭弁、等々）と弁証法との区別は、とりわけ、（客観的）弁証法においては相対的なものと絶対的なものとの区別もまた比較的（相対的）だということにある。客観的弁証法にとっては、相対的なものうちに絶対的なものがある。主観主義と詭弁にとっては、相対的なものはひたすら相対的であって、絶対的なものを排除する。

マルクスの『資本論』では、最初に、ブルジョア（商品生産）社会のもっとも単純な、もっとも普通な、もっとも根本的な、もっとも大量的な、もっとも日常的な、何十億回となく出くわす関係、すなわち商品交換が分析されている。その分析は、このもっとも単純な現象のうちに（ブルジョア社会のこの「細胞」のうちに）、現代社会のすべての矛盾（あるいはすべての矛盾の「胚芽」）をあげだす。それから先の叙述は、これらの矛盾とこの社会との発展を（成長をも運動をも）、その発展の個々の部分の総和において、その発展の始めから終わりまで、われわれにしめしている。

弁証法一般（というのは、ブルジョア社会の弁証法は、マルクスにあっては弁証法の特異なばあいにすぎないからである）の叙述（あるいは研究）の方法も、またこのようなものでなければならない。もっとも単純なもの、もっとも普通なもの、もっとも大量的なもの、等々からはじめること、木の葉は緑である、イヴァンは人間である、ジュチカは犬である、等々——のような任意の命題からはじめること。すでにここには（ヘーゲルが天才的にみとめたように）個別的なものは普遍的なものであるという弁証法がある（アリストテレス『形而上学』、第三卷、第四章、第八—九節、シュヴェークラー訳、第二卷、四〇ページを参照せよ——「なぜなら、われわれはもちろん、目に見える家々のほかに家——家一般——があるなどとは考えることができないからである」*）。つまり、対立物（個別的なものは普遍的なものに対立している）は同一である。すなわち、個別的なものは、普遍的なものへ通じる連関のうち以外には、存在しない。普遍的なものは、個別的なもののうちにだけ、個別的なものを通じてだけ存在する。あらゆる個別的なものは、（とにもかくにも）普遍的なものである。あらゆる普遍的なものは、個別的なもの（一部分あるいは一側面あるいは本質）である。あらゆる普遍的なものは、すべての個別的な事物をただ近似的に包括するだけである。あらゆる個別的なものは、完全には普遍的なもののうちにはいない、等々、等々。あらゆる個別的なものは、何千もの移行によって他の種類の個別的なもの（もろもろの事物、現象、過程）に連関している、等々。すでにここに、自然の必然性、客観的連関、等々の要素、萌芽、概念がある。偶然的なものと必然的なもの、現象と本質とが、すでにここにある、なぜなら、われわれが、イヴァンは人間である、ジュチカは犬である、これは木の葉である、等々と言うとき、われわれは多くの徴表を偶然的なものとして捨て去り、本質的なものを現象的なものから区別して、一方を他方に対立させるからである。

このようにして、われわれは、任意の命題のうちに、「細胞」のうちでそうであるように、弁証法のすべての要素の萌芽をあげだすことができる（またあげださねばならない）、このようにして、弁証法が総じて人間のすべての認識に固有なものであることがし

めされる。そして自然科学は、客観的自然が、個別的なものの普遍的なものへの、偶然的なもの必然的なものへの転化、対立物のもろもろの移行、変移、相互連関という同じ諸性質をもっていることを、われわれにしめしている（これもやはり任意のもっとも単純な実例についてしめさなければならない）。弁証法こそ、（ヘーゲルおよび）マルクス主義の認識論である。事がらのまさにこの「側面」（これは事がらの一「側面」ではなく、事がらの核心である）に、ほかのマルクス主義者というまでもなく、プレハーノフは注意をはらわなかったのだ。

* 《われわれはもちろん、個々の家のほかになにか家（一般）があるなどとは考えることができない》（編集者） 注）……は本文中の表記

第 36 卷『弁証法の問題について』P419～422 1915年に執筆

第 38 卷『弁証法の問題について』P325～329の8行目まで

コメント

「運動には山もあれば谷もあり、今は谷の時期だからじっと耐えなければならない」という俗物的な考え方と、レーニンのように、敵の攻撃を作用とみて、人民の反作用のエネルギーを確信し、起きていることに適時に反応して煽動することを基本とする態度とでは、雲泥の差がある。

われわれは、任意の命題のうちに、弁証法のすべての要素の萌芽をあばきださなければならない。個別的なものの普遍的なものへの、偶然的なもの必然的なものへの転化を認識する能力をもたなければならない。実践的には、資本主義社会の必然性をつかみ暴露しなければならない。

たとえば、消費税の増税について、「取って返すものなら取らなければよい」では、相手の階級の本質が大衆にはわはらない。なぜ「消費税の増税」が課題として提起されたのか、その原因を階級的に明らかにしなければならない。つまり、「今まで、世界中どこでも、資本の利益のために国債を発行して財政を拡大し、そのツケを国民に払わせてきた」こと、「その便利な道具が消費税であり、消費税は、その階級性が非常にはっきりした、最悪の逆累進課税であり、民主党も自民党同様に資本のため、大金持ちのために政治を行う政党であり、今は上げる時期ではないと言って批判している他の野党も民主、自民とまったく変わらないこと」、「税は資本主義的生産様式から利益を得ているものに負担させるべき」ことを明確に、分かり易く、具体的に言わなければならない。日本共産党を他党と分けるアイデンティティーはその階級性にある。

第 38 卷『弁証法の問題について』P329の9行目から

認識を一系列の円の形であらわしているのは、ヘーゲル（《論理学》を見よ）もそうであり、——また自然科学の現代、„認識論者“で、折衷主義者で、ヘーゲルぶり（彼はそれを理解しなかった！）の敵であるパウル・フォルクマン（彼の《[自然科学の] 認識論的基礎》を見よ）もそうである。

哲学における„諸円“：[人物についての年代記は必要か？ 必要でない！]

古代：デモクリトスからプラトンまで，と，ヘラクレイトスの弁証法まで。
ルネサンス：デカルト対ガッサンディ（スピノザ？）。
近代：ドルバック——ヘーゲル（バークレ，ヒューム，カントをへて）。
ヘーゲル——フォイエルバッハ——マルクス。

現実へのあらゆる接近の仕方、近づき方の無数の色合いをもつ（それぞれの色合いから一つの全一体に成長してくるところの哲学体系をもつ）、生きいきとした、多側面的な（その側面の数がたえず増大しているところの）認識としての弁証法——そこには、形而上学的“唯物論とくらべて測りしれないほど豊富な内容がある。この後者の根本的な不幸は、Bildertheorie（反映論…編集者）に、認識の過程と発展とに、弁証法を適用する能力がないことである。

哲学的観念論は、粗野な、単純な、形而上学的な唯物論の見地からすれば、たわごとにすぎない。これに反して、弁証法的唯物論の見地からすれば、哲学的観念論は、認識の特徴、側面、限界の一つを、物質、自然から切りはなされた、神化された絶対者へと、一面的に、誇大に、過度に（J. ディーツゲン）発達させ（膨脹させ、ふくらませ）たものである、観念論は坊主主義である。|| そのとおりだ。しかし哲学的観念論は、（より正しく言えば“そして、そのほかに”）、人間の無限に複雑な（弁証法的な）認識の色合いの一つをとおって坊主主義にいたる道なのだ。|| この警句に注意

人間の認識は直線ではなく（あるいは直線をえがいてすすむものではなく）、一列の円へ、螺旋へ無限に近づいていく曲線である。この曲線のどの断片、破片、一片も、独立の、まったくの直線に転化する（一面的に転化する）ことができる、そのばあいにはこの直線は（木を見て森を見ないならば）泥沼に、坊主主義に導いていく（ここで支配階級の階級的利害がその直線を固着させる）、直線性と一面性、硬直と化石性、主観主義と主観の盲目性、これが観念論の認識論的な根である。ところで坊主主義（＝哲学的観念論）には、もちろん、認識論的な根がある、坊主主義は根拠のないものではない、それは疑いもなくあだ花であるが、しかしそれは、生きいきとした、実をむすぶ、真の、強力な、全能な、客観的な、絶対的な人間認識の、生きた木についてのあだ花なのである。

コメント

弁証法は、現実へのあらゆる接近の仕方、近づき方の無数の色合いをもつ——それぞれの色合いから一つの全一体に成長してくるところの哲学体系をもつ——生きいきとした、多側面的な認識の仕方である。

哲学的観念論は、弁証法的な認識の仕方ももちいて、認識を物質・自然から切りはなされた絶対者へと、一面的に誇大に、過度に発達させたものである。

人間の認識は直線ではなく、一列の円へ、螺旋へ無限に近づいていく曲線であるが、この曲線のどの断片、破片、一片も、独立の、まったくの直線と見ることできる。このように、全体を見ずに、断片のみを支配階級の目で見ることが観念論の認識論的な根である。このように哲学的観念論は、根拠のないものではない。それは疑いもなくあだ花であるが、しかしそれは、正しい人間認識の、生きた木についてのあだ花なのである。